

報告

里山創造フォーラム 2018 in 紫波



町と（一社）紫波町農林公社、NPO法人紫波みらい研究所は2月24日、情報交流館で「里山創造フォーラム2018 in 紫波」を開催しました。県内外で活躍する方々の講演や、町と協定を締結している町内の森林で活動している企業による事例発表が行われました。



「間伐により空間が広がり、シドケが見えるようになるほど風景が一変しました」と話した三田地さん

最初に講演を行ったのは、岩泉町の「阿佐三里山保全の会」代表の三田地久志さん。三田地さんは「山の手入れは防災・減災にもつ

ながります」と話し、ツリークライミングなど子どもたちも楽しめる活動を通じて山林資源を活用する事例を発表しました。



続いて「炭窯元炭炭」代表の千田淳さんが自身の製炭業を通じての思いなどを発表。自身の役割を「木炭の焼き方や窯の作り方を後世に伝えること、木炭の良さや使用方法などを伝えながら木炭の普及活動を行うこと」と話し、「炭をつくることは山の整備にも



「木炭文化を残したい」という思いで活動する千田さん

つながります。これからは集約型製炭や問屋以外の販売ルートを確保することが必要です」と課題を述べました。



その後、紫波企業の森づくり活



現在、8つの団体・企業が「紫波企業の森づくり活動」に参加し、町内森林の整備作業に取り組んでいます

動について、町内の森林で活動するDCMホームマック(株)、TOTO東北販売(株)、(株)東北銀行、(株)藤村商会、盛岡信用金庫の5団体がそれぞれの取り組みを発表しました。



最後は高知県のNPO法人土佐の森・救援隊で理事長を務める中嶋健造さんが「地方創生の本丸・持続発展可能な地域開発の力」をテーマに講演。

中嶋さんは「現在、列状間伐や過間伐が一般化しています。

限られた森林から毎年持続的に収入を得るために、山林所有者や地域住民は長期的な多間伐実施を行い、永続的な森林経営をしなければなりません」と訴えました。



委託型ではなく、山林所有者や地域住民が主体の自伐型林業を進める必要があると話した中嶋さん